初期の戰爭文學

——報告文學として——

瓜生茂秋

一

我が國の戰爭文學といへば軍記物語、戰記物語等の名稱のもとに普通保元、平治物語、平家物語、太平記、義經記曾我物語の六物語が指される習慣になつてゐる。從つてこれまでの戰爭文學研究は此等六物語の最初と目される保元、平治物語に出發點を求めてゐる。だが戰爭文學樣式を歷史的具體的に眺めると保元、平治物語が何等の先縱なき戰爭文學の新領土に突如その輝しい光芒を現はしたのではなく、それより三百餘年前既に成立してゐた將門記以來今昔物語や陸奧話記等に根跡をとゞめてゐる戰爭文學なる新樣式獲得の爲めの數多い努力、或は戰爭文學を發展推進せしめた種々なる社會的要因の結果、結晶として保元、平治物語の成立を見たのである。この保元、平治物語以前の戰爭文學樣式獲得への多くの努力なり、社會的要因なりを抹殺して戰爭文學の研究を一種の便宜主義的立場より保元、平治物語から始めてゐたこれまでの研究は戰爭文學樣式を具體的、歷史的に把握せざるものとして嚴しく批判さるべきではあるまいか。殊に或る文學樣式の初期の原始的狀態は其の文學樣式の將來發展すべき方向なり、あるべき性格構造なりを端的に露出してゐると思はれる。保元・平治物語を始めとし次にもたらされる戰爭文學の樣式的特質は實

はかへつて保元・平治物語以前の作品に現はれてゐるとも考へられるから、此等の作品（初期の戰爭文學作品）を抹殺し、輕視した此までの研究は日本の戰爭文學理解の狹き門を自ら閉すものと言はねばならない。

初期の戰爭文學に就いては此までの研究が絶無であつたわけではない。古く既に平安末期、承德以前に將門記の加點、加註が行はれてゐたし、今昔物語卷二五に載せられてゐる一群の合戰話の中のあるものは初期の戰爭文學作品の文學的再生とも見られる。降つて明治以後にも星野博士の資料紹介風の研究、大森金五郎氏の武家時代の研究、更に近くは高木武博士の研究もある。然し平安末期の研究は研究と言ふより單なる故事の註解、漢文の口語化程度であり、明治以後の研究も歷史學の立場からの史料としての考察であるか、初期の戰爭文學作品の各個バラバラの研究であり、共に戰爭文學樣式獲得の歷史としての具體的、歷史的な研究とは言へない。この意味で初期の戰爭文學を戰爭文學樣式獲得の歷史として具體的に追求することは價値ある問題ではなからうか。

二

これまで初期の戰爭文學と云ふ熟さない言葉を無斷不用意に用ゐたがこの小試論の對象、範圍を明瞭にする爲め一應簡單にこの言葉に意味させた戰爭文學作品について述べておきたい。

前にも述べた樣に此まで一種の習慣として取上げられてゐた六の戰爭文學作品中最も早く成立したものは常識的には大した疑問もなく保元・平治物語であるときめてかゝつてゐるが、果して保元・平治物語が平家物語より早く成立したかには今猶餘程疑點が殘されてゐる。學者の間にも例へば藤岡博士や野村博士のごとく平家物語先行說を提唱さ

れる方もあり、それに對抗して科學的な立場から保元・平治物語先行說を支持される五十嵐博士や高木武博士の研究もあると云つた具合に兩物語の先後問題は開拓さるべき餘地を多分に殘してたまゝ現在まで持越されてゐる。然もこの問題は戰爭文學の展開を正しく追求する上には必ず征服されねばならない重大問題でもあるが、これに關する私見は近く別の機會に批判を仰ぐことゝして、こゝでは色々の點から金刀比羅本保元・平治物語は覺一別本平家物語（岩波文庫）より最少限七年、最大限二十年早く成立したとの愚考を述べるにとゞめておきたい。從つて金刀比羅本保元・平治物語が少くとも成立してゐたと思はれる天福元年（一八九三）以前に成立した、戰爭を中心素材にした物語を初期の戰爭文學作品としたい。かく考へると將門記、純友追討記、陸奥話記、六代勝事記の四が問題なく這入るが、猶此の他に今昔物語並古事談は他の說話文學と違つて戰爭に關聯ある說話のみを一括類集し、特に一卷を立てゝゐて、戰爭說話には特異な態度を示し共に天福元年以前の成立であるから前記四作品の外、今昔物語廿五（今昔物語攷證本）古事談第四をも資料としたい。

前九年の役を記載した陸奥話記と關聯してすぐ頭に浮ぶのは後三年の役を取上げてゐる奥州後三年記である。然し現在傳つてるものは吉記等に見える承安年間（一八三一——一八三四）に靜賢法印が總裁となつて製作した後三年繪卷の詞書ではなく、序文にも明らかな樣にはるか後の貞和三年（二〇〇七）に成立したもので、承安年間の繪卷の詞書とどんな關係にあるかは不明であるが、こゝでは參考資料にするにとゞめておきたい。猶承久記も保元物語以後と考へられるから此亦此際除外しておく。唯一つ困難な問題は現傳の諸平家物語の根源となつたと思はれる平家記又は治承物語と稱ばれたと思はれる物語が少くとも承久二年以前に存在してゐたと考へねばならないが、平家記（治承物語）

は種々なる點よりその大體の輪廓をつきとめることは出來るが、現在のところ名稱が知られてゐるのみだからこゝでは參考とするにとゞめたい。

以上大體こゝでは將門記、純友追討記、陸奥話記、六代勝事記、今昔物語廿五、古事談第四、を主とし、奥州後三年記、平家記を參考材料として初期の戰爭文學を考察したい。

三

將門記を見ると平將門が天慶二年に關東八州を領有し、國守を追放したとの報告が都に達すると京都は周章狼狽、將門懲服の爲め諸神諸佛に邪滅惡滅之法や頓死頓滅の式を執行させその爲め「所燒之芥子七斛有餘」と記してゐるが、この一事を以ても天慶の亂が如何に平和になれてゐた京都の人達を驚かせたかは想像するにかたくない。時あたかも西海には純友之逆亂さへあり、文弱に流れてゐた京都人士は期せずして起つたこの東西の反亂に驚倒のあまり、これはてつきり東西氣脉を通じ、相呼應して朝廷を滅さうとたくらんだものと誤解し、流言蜚語が亂れ飛んだ樣子は大鏡が史實を誤まれる記述を殘した點から見ても明瞭に觀取される。眼を轉じて六代勝事記の序文を見ると、六代勝事記筆錄の直接動機を

普天かきくもりし夕立の神なりにおどろきて其の事のわすれざるはしばしばかりを書きあつめ侍る。

と述べてゐる。こゝに「普天かきくもりし夕立の神なり」とあるのは三上皇配流にまで及んだ承久の亂への作者の驚きを率直に告白したものである。もと六代勝事記の筆者は「さまをかへ衣をそめ、彌陀を念じ、極樂をねがふにふた心」

をなくし、修道に精進して一端は「世事すべていとはれ」文筆を捨てること久しかつたのであるが、にもかゝはらず、承久の亂起り、京都は坂東武士の馬蹄に蹂躙され、史上かつてその例なき三上皇同時の配流と云ふ異常なる現實の前に立たされた時、そのあまりにも強き衝擊に世を厭ひ自らさへを忘れ、默すること能はず筆取つたのである。

六代勝事記にその典型的な姿を見ることが出來る樣に、初期の戰爭文學は平安末期に起つた地方の爭亂より受けた默し得ない衝擊が生み出したものである。承久亂をのぞけば此等の爭亂は都を離れた地方での爭亂であつた。從つて都人の受けた衝擊は單なる恐怖でなく、そこに多くの好奇心さへ混じてゐた。陸奥話記を見ると、

同六年二月十六日獻貞任經淸首三級、京都爲二壯觀一車擊レ轂、人摩レ肩

とある。叛將貞任等の首級が到着した日の都の雜閙についてのこの記事を見ても都人が此等の爭亂にこはごはの懼れ心を抱くと同時に好奇の眼を如何に大きく瞠してゐたかを想像することが出來る。更に後に問題にする如く初期の戰爭文學作品は取材した戰爭と、共に或は戰爭の直後筆とられたものである點等をも併せ考へて筆者達は自分の受けた大きな衝擊の體驗を好奇の眼を瞠す人々の要求に答へる心持にも手傳はれて筆錄したもので此等の作品は一種の報告文學と言ふことが出來るのではなからうか。以下私はこゝに腰を据ゑて一種の報告文學としての初期の戰爭文學の樣相を追求して見たい。

四

さて細かに初期の戰爭文學筆者達の筆錄意圖をそれが意識的に表現されてゐる部分を檢討して見ると、必ずしも報

告文學の創作を意圖してゐたとは考へられない點が多い。先づ私は彼等が意識的には何を意圖してゐたかから問題にして見よう。

先づ陸奥話記を見ると其の最後に

今抄二國解之文一拾二於衆口之話一注二之一卷一、但千里之外、定テ多ク紕二謬セン之一、知レ實者正レ之而已。（阿波國文庫本による）

とある。此によると陸奥話記の筆者は一卷を注するにあたつて國解之文即陸奥地方の國守の解文等信ずべき公文書を第一資料としたのであつたが、當時都に凱旋してゐた戰士達の戰功談にも心ひかれ、衆口之話をも參照するに至つた。然し戰地を遠く離れた京洛の地にあるので、耳をかし、心ひかれた凱旋戰士のてがらばなしが果して那邊まで信ずべきものであるかに疑惑を感じ、千里之外定多紕謬之と自ら警戒し、知實者正之而已と要望するに至つてゐる。

この跋文によれば陸奥話記の筆者に取つては文學の創作は決して第一義的目的ではなかつた。彼等の意圖は例へば平家物語に於ける如く文學的要請の爲めには史實からの飛躍を敢てしてかへりみない樣な態度とは凡そ對蹠なもので史實を取捨案配するどころか史實からの一歩の逸脱さへ嚴しく警しめ、あくまで史實の正しき筆錄に終始せんとしたものと言はねばならない。史實を固執し、史實からの乖離を恐怖するところに文學はあり得ない。陸奥話記筆者の意圖は寧ろ正しき歴史書の筆錄にあつたと見る外はない。次に將門記を見ると、將門平定を書いて後更に冥界に於ける將門の後日譚を加へてゐる。この後日譚を載せるにあたつて嘶の冒頭に用意深く「諺曰」の二字を冠らせてゐる。諺の字は將門記にも用例があり、猶當時の辭書に徴するに大體庶民間の「ウワサ話」の意味に解すべきであらう。將門記があの說話の上にこの諺曰の二字を用意深く冠らせたのは愚管抄が「人語リ傳フル事ハ皆タシカナラズ」（卷二）と

ウワサ話の史料として信ずべからざる事を注意してゐるのとほゞ同樣な意圖のあらはれではあるまいか。若し斯く考へることが許されるならば將門記の筆者に於ても諸記錄、國解之文並自己の體驗とこのウワサ話との間に資料としての價値に差等をつけ、區別してゐたと見ることが出來る。かくて將門記の筆者に既に一種の資料批判の行はれてゐた事は將門記筆錄の意圖が正しき歷史書であつた事を明瞭に自ら物語つてゐると云はねばならない。

更に六代勝事記を見ると、

心は權實の敎法にあひて善惡この果をさとり、和漢の記錄をつたへて治亂この政をつゝしむ。ゆへにいささか先生の德失をのこし、をのづから後世の宦學をすゝめむ事、身のためにして是をしるさず、世のため民のためにして是を記せり。

とありこゝに到ればその意圖は單に正しき史實の記錄にとゞまることなく更に進んで春秋の範柵にも類比し得る後世の龜鑑たる、正史の筆錄をさへ企圖してゐたと考へなければならない。

かくて初期の戰爭文學筆錄の意圖は史實を取捨選擇し、そこから自由に飛躍する文學作品の創作ではなく、あくまで史實そのものに忠實なる正確な歷史記錄の叙述にあつたと言はねばならない。然らば果して彼等が意圖せる如く將門記なり陸奥話記なりは正確なる歷史書として書き上げられたであらうか。彼等の企圖は實現されたであらうか。前掲の陸奥話記の跋文に「千里之外定紕謬之」と云ふ時そこには作者の側に於て意圖と實際の陸奥話記との間に相當の距離が出來、ギヤツプがあることへの危懼がひそんでゐると見ることが出來るのではあるまいか。次に筆者達の意圖から暫く眼を轉じて實際の作品に降り立つてゆくこととしたい。

木の實は熟して後始めて落ちるのであるが、歴史も同様歴史が書かれる爲めには史實其自身が一應まとまり、完結して客觀的な批的に堪へ得る様にならなければならない。この爲めには史實との間に一定の時の經過、距離が必要である。將門の亂や承久の亂に遭遇した初期の戰爭文學の筆者達は前述の如く正しき歴史書の筆錄を意圖したのであつたが、これらの作品の筆錄と將門の亂や承久の亂との間には果して爭亂の意味が正しく歴史的に意義づけられ、措定され得るだけ充分な時の經過が與へられてゐたであらうか。作品そのものを問題にする前に作品そのものを把握する一の足場として筆錄の時と爭亂との距離に注意して先づ各作品の成立時情を追求しよう。

五

將門記はその末尾に

天慶三年六月中記文

と、その成立時を明記してゐる。將門記中日附の明瞭な最後の事件は

便自下野副解文以同年四月二十五日其頸言上云々

であつて、天慶三年四月二十五日の事である。從來將門記の成立時期については星野氏の考說に從つて亂後數ケ月を出ずして筆錄されたものと考へられてゐるが、以上の如く日附の明瞭な事件のみについて見ても其の最後のものと末尾の六月中との間には僅々一ケ月餘の短時間の經過があるのみである。若し、日附の明記されてゐない事件をも考慮に入れるならば將門記の成立は寧ろ將門の亂直後と考へる方が自然である。更に眞福寺本將門記を見るに、最後に

「或本云」として異本の本文をかゝげてゐるが其の最後に

若有非常之疑後々達者旦記而已矣

の文字が見える。この後々達者旦記而矣の文字は將門記成立の事情を暗示するものではあるまいか。即、將門記は新しい事實が手に入る毎に次々に書き繼がれていつたものであるとまでは言へないとしても、少くとも筆者が爭亂の實情を目擊する毎に、耳にする度に、手控として書きとめておいたものを將門の叛亂鎭定直後この手控を國解之文等と案配し、綜合して一冊の書にまとめあげたのではあるまいか。そしてその筆錄態度の片鱗が後々達者旦記而已矣に痕跡をとゞめてゐるのではあるまいか。

將門記中日附の明かなものゝ中、最も古いのは延長九年(一五九一)の記事で、天慶三年(一六〇〇)に先立つこと九年である。かく將門記の記事が約十年にわたつてゐる點から、又前記異本の本文の末尾と照しあはせ、そこに多少の臆測を加へることが許されるならば將門記の筆者は延長九年頃から見聞した主要な事件を次々に書き綴り、更に將門の亂が平定した直後他人の記錄や國解之文等をも參照して天慶三年六月中に一冊の稿を終つたのではあるまいか。若し前の六月中が中旬の意であつたとしてもこの推定にはさしたる關係はないが、若し六月までゞの意で六月中にやつと脫稿し得たのであるとの意に解することが許されるならば以上將門記成立への推定、可成大膽な推定は一つの傍證を得ることゝもなると思はれる。ともあれ將門記が將門の亂と共に刻々に生長し、その直後完成されたものであるとまではゆかないとしても少くとも將門記が將門の亂の直後に書かれたものであることだけは動かないところである。

猶又陸奥話記に就いて見ても前引康平六年叛將の首級が入洛した當日の都大路の雜鬧を記せるところに

京都爲壯觀、車擊轂、人摩肩子細注別紙也

と割注を附してゐる。これによれば陸奥話記の筆者には日件錄風にその當日又は當日をあまりへだゝらざる日に物された別紙をなす一文のあつた事が知られると同時にこの作者の原註の書き振から推して、正確な年次は今知る由もないが、大體に於て將門記同樣陸奥前十二年戰爭の終了後あまりへだゝらざる時に筆錄されたのではあるまいか。

唯、六代勝事記はこの書名が示す如く高倉天皇安元の頃より始めて後堀河天皇の貞應年間まで六代（正しくは七代中恭天皇は數へられてゐない）約六十年間に起れる重大事件を記錄したもので、必ずしも事件と共に、事件の直後に書かれたものではないかの感もある。然し、其の序文にも明らかな樣に、もとこの書に記載されてゐる承久の亂以前の諸事件は作者がいつか夢の中に忘れ去らうとしてゐたものであつた。然るに、筆者がかつて關係してゐた公卿階級の政治的位置を根底からくつがへすに至つた承久の亂並その結末としての三上皇の配流にあまりにも驚倒し、一度は捨てた筆を再び取つたのであつて、六代勝事記に於て承久の亂以前の記事は寧ろ承久の亂並びにその恐るべき結果を將來せる原因への回顧、反省にともなつてうすれた記憶の中から操ぐり寄せられたものであり、あくまで筆述の直接動機をなすものは承久の亂並にその結果にあると言はねばならない。この意味から言つて六代勝事記も亦戰爭直後の成立と見ることがゆるされるのではあるまいか。

かくて、初期の戰爭文學はその取材せる戰爭と共に或は戰爭の直後筆錄されたものと言はねばならない。一體現在のジヤーナリズムの動向を見ても明らかな如くニュースは本質的により新奇なものを求め、報道が一刻を爭ふのは報道其自身の根本にねざす本質的要求である。然るに報道がかく新奇性をあくことなく追求すればする程報道せんとす

る事件の内實に肉迫することを困難ならしめ、事件をたゞその周邊に於て極く皮層的に類型的に把握することを餘儀なくせしめられ、敏速に事件の眞相を把握すべきニュースは實はかへつて事件の周邊的なものに壓倒され、おし流されるに至る。殊に報道せんとする事象が空間的に距離をもち、或は報道者側に於ける焦點距離と事象のそれとが重り合はない時、一種の獵奇的な好奇心さへ混入して來て正確なるべき報道が誇張歪曲される傾向を持つ。

さて將門記が將門實説の後日譚の前に「謗曰」の二字を特に据ゑたのは前述の如くウワサ噺が資料として信賴し難いものであるとの批判が現はれてゐると同時に、他面、史實を追求する筆者としてはコトワザを輕視しつゝも人間として多くの興味と關心をそゝられた事實を物語るものではなからうか。又、陸奥話記が「定多紕謬之、知實者正之而已」と正確な史實の記述を意圖しつゝも猶衆口之話を捨て去ることが出來なかつたのは全く遠隔の地、陸奥に行はれた極めて報告價値に富む新事變への沈潛なき輕浮にすべる好奇心を拂ひのけきることが出來なかつた爲めではあるまいか。當時都に於て陸奥の前十二年役を始め地方騒亂にまつはる戰功談、ウワサ噺がどんなに新鮮な話題として人々の口に上つてゐたかは古事談に

白川院御時後藤内則明、老衰之後召出テテ合戰之物語セサセラレケルニ先申云故正キミ(義家カ)ノ朝臣鎭守府ヲ立テアイタ(秋田ィ)ノ城ニ付侍之時雪ノ降侍シニイクサノ男共ト申之間法皇被仰云今ハサヤウニテ候ヘ事ノ體幽玄也、殘事等定此一言サ(トィ)テ賜御衣云々

とあるによつても推察するにかたくない。此とほゞ同樣な話は十訓抄にも載せられてゐて、この後藤内則明は河内守則經の子、藤原則明であつて前十二年合戰後都にかへり、内舍人として宮仕へして後藤内と號した人で、陸奥話記天

喜五年十一月の戰條に源頼義、義家が一敗地に塗れた時を述べたところに

所殘纔有六騎長男義家……中略……藤原範季、同則明等也

とある者で彼が老後白川院に召されて奥州合戰の物語を奏上した口吻には、法皇に「今ハサヤウニテ候ヘ非ノ體幽玄也」と御感歎させ申し上げた話術が觀ぜられるのは私一人であらうか。ともかくこの後藤内則明の場合の如く各地に轉戰した武士達が都人相手に戰功談を誇張しながら物語つたに違ひない。陸奥話記の筆者がかうしたウワサ話に耳ふさぎ得なかつたのは蓋當時の事情としては又止得ざることであつたと見なければなるまい。

陸奥話記を見ると源義家の奮戰を述して

將軍長男義家驍勇絶倫、騎射如神、冒白刃突重圍、出賊左右以鏃箭頻射賊帥、矢不空發、所中必斃、雷奔風飛神武命世、

とあるなどこゝに大衆的英雄主義の誇張があるのは否めまい。これは今昔物語が

此ノ事聞ヘテ極ク賴光ナム讃ケルト語リ傳メカムヤ

と率直に告白してゐる如く、ウサワ噺に好奇の耳を欹てた筆者の態度が必然的にもたらしたものであらう。將門記に於て遭遇する漢土の故事を踏へた空疏な誇張もこれと同樣な事由によるものであらう。

かくて初期の戰爭文學は戰爭の正確、忠實な記述を意圖しつゝも彼等があまりにも早く新事實に心ひかれたが故殊にそれが遠隔の地で行はれた戰爭であり、次に指摘する如く筆者達と性格を異にした新世界の事柄であつた點さへ作用し、遂に事實の歷史的意味を確把し、批判し拔いて、彼等が企圖の如く正しき歷史書を書き上げることを不可能な

らしめるに至つた。新事變を敏速に記錄、報告せんとした初期の戰爭文學の筆者達は彼等があまりにも早く筆取れるが故にかへつてそれら戰爭の周邊的なるものに壓倒され、虛妄な獵奇の虜に身をおとさなければならなかつた。史實への固執から解放された筆者はこゝに一歩文學の世界に近づくを得たが虛妄なる獵奇の虜となることによりその文學を低劣化する危險に曝されるに至つた。では果して此等の作品は說話文學と選ぶところなき單なるウワサ噺、誇張された戰功談の集錄にとゞまつたであらうか。既に初期の戰爭文學が正確なる歷史書を意圖しつゝも失敗したる事を指摘した私は次に彼等の失敗せる歷史書、報告書の背後にひそむものに眼を轉じてもつと正確に初期の戰爭文學の實體を把みたい。

六

陸奥話記を見ると天喜五年十一月源頼義、義家が手兵八百を率ゐて敵將貞任の據る河崎柵の攻擊に向つたが途中風雨はげしく人馬は行軍に先づ困憊した。疲勞をおして敵を強襲したが果して味方の死傷者續出、遂に大敗を喫した。大將の守兵さへ四散し、僅か主從六騎になつていつか將軍の戰死の流言まで飛ぶに至つた。この時士卒中、佐伯經範、藤原景季、藤原茂頼等は將軍の生死を案ずる餘り、敵陣に斬り込み奮戰遂に戰死した。筆者は以上三人の主を思ふ心を各一人づゝ次々に叙述してゐる。勿論多少の誇張は前にも述べた樣にこゝでも行はれてゐるが誇張の表皮を破つてその深部に三人の主の生死を案ずる心、奮戰にうたれ、死を傷む心のありありと潜んでゐることは注意されねばならない。又、將軍の士率を思ふ心を、

將軍還レ營且饗二士卒一且整二兵甲一、親廻二軍中一療二疵傷者一、戰士感激、皆言身爲レ恩使、命依レ義輕、今爲二將軍一雖死不レ恨、彼燒レ鬚吮レ癰　何得加レ之

と昂つた文字で寫し、更に

先是獻首使者率二貞任從者降人一也、稱二無レ櫛山一、使者曰、汝等有二私用櫛一、以レ其可レ梳レ之、櫛夫則出レ櫛梳レ之、淚嗚咽曰、吾主存生時、仰レ之如二高天一、豈圖以二吾垢櫛一忝梳二其髮一乎、悲哀不レ忍、衆人皆落淚、雖二櫛夫一、悉感二忠義足一レ感レ人者也

に至ると主從の溫い情感が率直な同感と感激をもつて書かれてゐる。殊に「忠義足令感人者也」の書き振には第三者として高所に立つ餘裕も見られるが、この物語への筆者の深い感激がもらされてゐることは斷じて疑へない。特にこの場合名もなき一櫛夫が叙述されてゐることは筆者の戰爭觀照が鋭く、細かに深まつたものとして注意される。

次に將門記を見るに「鞭を揚げ名を稱へて」敵を追討する將門の勇姿や「其日暴風鳴枝、地鏑運塊新皇之南楯拂前自倒」云々と土塊吹きすさぶ日の雄々しくも亦悽慘なる戰場の描寫には誇張された表現をおし破つて迫る潑剌たる生氣を感ずる。或は戰に敗れ將門の追討を逃れんがため山中に身を潛ませ不安の幾夜を明す貞盛の恐怖の追求は眞に迫つてゐる。一體將門記の筆者は實際戰場の苦しい狀景を目擊しただけにその作には一種沈鬱な迫力さへ感ぜられる。又、「ト語リ傳ヘタリトナム」と書いて說話を結んでゐる今昔物語も其第廿五卷、第五話、餘五將軍出陣の勇士の刻明な描寫等を見れば素朴な然し、犀利な筆者の目の片鱗がきらめいてゐる。

かくて初期の戰爭文學は成立の特種事情より正史を企圖してならず、輕浮虛妄な單なる說話の類從に墮する危險性

を多分に持つてゐたが、合戰噺に好奇の眼を輝しつゝも筆者の深底に於て上述の如く新興庶民たる武士生活への深き同感があり、感激が生々と體驗されてゐた爲め、誇張の表現をつきぬけそこに一種の迫力ある生命が獲得されるに至つた。筆者達の取材せる素材が其自身劇的なる戰爭であつただけに戰場と武士への理解と感激があればその作品に平安朝物語文學とは異る極めて動的な素朴な迫力のもたらされる事は理の自然である。この戰爭其物からの感銘こそ、より深い意味に於て筆者達を冷かなる史家たるにとゞまることを拒否したものと見なければならない。と同時に彼等を單なる說話の浮薄な類集者たることからも救濟した。

七

上來初期の戰爭文學作者の戰爭其物への理解の深さと同感の切實さについて述べたが、如何に戰爭への理解と同感があつても若し何等かの意味で筆者の主觀の側に於て統一がなければその作品は單なる雜錄以上には出で得ない。ともかく筆者の主觀的統一は全ての現實主義的文學に絕對不可缺の問題である。

さて將門記を見ると戰亂の爲め人馬家財が一時に荒廢に歸したのを傷み「三界火宅財有五主、去來不定、若謂之敵」と云ひ、又、最後に將門が今世で一善の心さへ起さなかつた爲め來世で墮地獄の苦を受け、苦しさの餘、來世から現世に消息をよせ「抑閤浮兄弟娑婆妻子、爲他施慈爲惡造善、雖口甘恐不レ可レ食二生類一、雖心惜而好而可施供佛僧者」と傳言したと叙べてゐるのは筆者が不殺生戒の嚴守と佛僧の供養を懲慂したものでこゝでかすかながら筆者の佛教的世界觀による主觀の統一が認められる。然し猶異本の部分を見るに「前生之男不成死後之面目惶々之報受憂々之苦」

と述べてゐて將門記の佛教思想はすぐ儒教的勸善懲惡思想と結びつく觀念的遊離的なもので未だ作品の背後を力強く貫き、それを一つの緊密な統一にまでもたらすには餘りに無力であつた。戰爭文學が佛教的無常感に貫かれ統一づけられるには方丈記を經て平家物語をまたねばならなかつた。初期の戰爭文學を統一づけるものは佛教思想ではなくむしろ儒教的倫理感である。將門記に

爰將門頗積功課於官都、流忠信於永代、而一生一業猛濫爲宗、每年每月合戰爲事、故不屑學業之輩、此只翫武藝之類、是似對楯問親、好惡被過、然間邪惡之積、覃於一身、不善之謗聞於八部、終殞版泉之地、

とあり、六代勝事記が其の序に

心は權實の教法にあひて善惡二の果をさとり、和漢の記錄をつたへて治亂の政をつゝしむ。ゆへにいささか先生の德失をのこしをのづから後世の宦學をすゝめむ事、身のためにして是をしるさず、世のため民のためにして是を記せり。

と述べてゐるのを見ても筆者達の執筆意圖に相當明瞭な倫理的批判が存してゐたことは事實である。たゞ此等の思想は作品の頭初に又は末尾に添加され、冷かなる批判の形で露出したもので未だ作品の中に融化し、血肉化したものではなかつた。戰爭文學史が此の點に成功するには保元・平治物語の出現をまたねばならなかつた。

よし觀念にすぎず露出されたものであつたとしてもこれら初期の戰爭文學の筆者が單なる戰爭への感激に壓倒されてしまふことなく、佛教的な、あるひは儒教的な知性から感激に秩序を與へようと意圖し、努力した事だけは認めなければならない。かくて初期の戰爭文學には極くかすかではあり多分に觀念的にではあるが一種の主觀的統一の萠芽が

ひそんでゐるとは言へると思ふ。勿論それは保元・平治物語、平家物語によつて高く完成され、發展されるものではあつたが原初的な文學性が既に此等初期の戰爭文學に兆してゐることは疑へないと思ふ。

八

以上初期の戰爭文學の報告文學性を考察したがこゝで翻つて此等の作品が最初の將門記(天慶三年一六〇〇)から最後の六代勝事記 貞應年間一八八二—三)まで約三百年間に如何なる展開を見せたかに注意し、初期の戰爭文學の獲得せる文學性を歷史的具體的に措定して見よう。この問題を明らめる爲め先づ作者の側面から斬り込んでゆきたい。

將門記はその地理に關する記述が正確であり、且つ、前述の如く筆者の世界觀が佛教的であり、叙述が一種沈鬱なる迫力を持つてゐる點等から考へて大體東國止錫中の僧侶の手になつたのであらうと此までも述べられてゐる、陸奥話記に

藤原信賴者將軍服心也、驍勇善戰　軍敗之後數日不レ知二將軍所二在、謂已沒レ賊、悲泣曰、吾求二彼骸骨一、方葬二斂之一、但兵革所レ衝、自レ非二僧侶一、不レ能二入求一、方剃髮拾二遺骸一耳、則忽出家爲僧、指戰場行

とあり、僧侶のみは戰線の出入を許容されたらしい事實から見て、將門記の筆者が僧侶であつただらうとの此迄の推定は先づ動かないところであらう。

次に六代勝事記は其の序に

昔は蓬壺の月にかげをまじへ、今は蓮臺の雲に望をかけたる世捨人侍り。

とあつて筆者が公卿出身の僧侶であることは疑へない。總じて初期の戰爭文學の筆者には僧侶が多く康富記文安元年閏六月二十三日の條に見える後三年繪卷も靜賢法印が總裁となつて造つてゐる。

陸奥話記筆者に就いては既に考證があるが未だ閲讀の機會を得てゐない。唯、彼が陸奥千里之外なる京都在住の公卿であることだけは疑へないところであらう。かくて初期の戰爭文學の筆者は公卿階級又は公卿階級の文化を支持する第三階級とも見るべき僧侶であつたと言はねばならない。

一體初期の戰爭文學が取材した戰亂は要する新しき庶民階級の舊公卿的なるものへの挑戰と見るべく、そこに活躍せる武士は未だ教養に歪められ、文化に弱めらるゝことなき素朴な然も若々しき精神の持主達であつた、從つて彼等武士の世界は糜爛した文化に醉ひ、教養の爲めに軟弱化された公卿や僧侶には遂にその本質に於て理解し能はざる異質のものであつた。かく初期の戰爭文學の筆者は新興武士の生命が最も端的に、最も力強く表現された戰爭と云ふ事實に面接し驚奇の眼を瞠り、と共に強い壓力をも感じて前述の如く可成の理解にまでは到達したが窮局に於ては新興武士と袂をわかたざるを得ない宿命を荷つてゐた。戰亂への獵奇心と驚亂とが知性に秩序づけられ次第に本來の筆者達の世界が現前して、前述の主觀的統一がもたらさるればする程、實は武士の生命より遠ざかり、遂には戰爭に眼をつぶるに至るのである。將門記は將門の墮地獄を例證として不殺生戒の嚴守を慫慂してゐて、本來殺生なくてはかなはぬ武士に不殺生を強要し、將門の奮戰に驚歎しつゝも「前生之勇不成死後之面目」としかへつて「恢々之報受憂々之苦」の因となつたとするウワサ話に同感の雙手を擧げるに至つてゐる。かくて將門記の筆者は其の根本に於て武士への理解を放棄し、それとは異質の世界觀に立ち冷かに裁斷的に武士の戰亂を批判した。こゝにこそ前述の將門記の

主觀的統一の萠芽があくまで萠芽に過ぎず、觀念的なものを一歩も出ることの出來なかつた深き原因がある。

將門記に於て外に向けられた眼は六代勝事記に及ぶと次第に內に向けられる樣になつた。六代勝事記は六代の間に相繼いで起る勝事の原因を武士の叛亂に求めず公卿自らの失政に求め、

六十年よりこのかた好文重士の君まれにして政道過○に亂るるたびに其身やすからず。

と一篇を結んでゐる。武士に不殺生戒を垂訓することを中止して公卿自らに猛省を促して「知人」と「撫民」の爲政たる要德を磨かんことを望んでゐる。六代勝事記の筆者が公卿自らに反省を要望したのは將門の亂、保元・平治の亂承久の亂と次第に沒落の道を辿つた公卿の社會的地位を反映してゐるものであらうが、ともかくそこには自己への凝視と沈潛とがある。然し、初期の戰爭文學の筆者は眼を內なる自己に轉じてそこに沈潛するにつれて客觀から次第に目をそむけ、やがて眼を閉し、遂には涙もろい感傷におち入つて行つた。初期の戰爭文學中最後の六代勝事記は最も感傷性に富み、多くの涙がこぼれてゐる。將門記、陸奧話記に於て獲得された戰場に馳驅する勇士の活寫は六代勝事記に至るとほとんど影をひそめてゐる。この六代勝事記の戰爭文學としての低調化は新興武士と異質の文化を持つ筆者達が戰爭に直面して自らを反省し自己の世界に立かへればかへる程戰爭と武士とから遠ざかり、戰爭文學作者として自らを否定せる最も典型的なあらはれである。初期の戰爭文學の筆者達は主觀をとぎすませばすます程冷かな高踏的、裁斷的批判の立場に立つ外なかつた。

こゝに初期戰爭文學の歷史が發展の歷史でなく寧ろ墮落の歷史を步まねばなければならなかつた原因がひそんでゐる。筆者の側に於て自らの世界が放棄され、戰爭と武士の世界への裸身の突擊が敢行されない限り戰爭文學史は展開

の道を持たない。これを敢行せるものが保元・平治物語であり、平家物語であるが、將門記、陸奥話記以來三百年の間を次第に低調化し來たつた戰爭文學は一氣にして保元・平治物語を獲得し得たとは現傳の文字資料に執着する限りどうしても理解し得ない。六代勝事記と保元・平治物語の間に横はつてゐる深い溝渠は文字資料に執着することなく口承の世界に眼を轉ずることにより始めておどり越えることが出來るのではあるまいか。文字に記載されざる合戰噺、戰功談の盛行、やがて來る專門の戰爭話の語り手の出現への注意こそ初期の戰爭文學から保元・平治物語への展開を正しく位置づけ得る唯一の道であらう。從來の戰爭文學の研究は此の點に於ても嚴しく批判さるべきである。

九

以上私は先づ初期の戰爭文學筆者達が正確なる史實の記載を意圖して成らず、一種の報告文學者たるの外なかつた事情を明らかにし、最後にその獲得せる文學性が筆者達の世界觀の構造と武士、戰爭への理解との特殊關係より萠芽的なもの以上に出ることの出來なかつた點を述べ、要するに初期の戰爭文學の歷史が發展の歷史でなく後退の歷史であることを一應明らめ得たかと思ふ。